

ある米兵の思い出

沖縄赤十字病院 産婦人科 正本 仁



人には誰しも頭に付いて離れない子供の頃の光景があると思う。私にとってのそれは、幼少期に見たある米兵の姿だ。

幼稚園か小1の頃だっただろうか、当時は米軍基地内で働いていた父に連れられて、そのころは北谷にあった旧海軍病院（私の記憶が正しければ当時は陸軍病院）へ行った。知人のお見舞いか何かであっただろうが、初めて来た広い病院内で迷子になった。ずっと後で知る事となるが、当時の陸軍病院は過酷な戦闘が続いていたベトナムから帰還した多くの傷病米兵が入院していた。

父を探してある病室の前を通ったとき、ふと中から自分を見つめている人がいるのに気付いた。今でも覚えているが美しい金髪の青い瞳の白人青年で、ベッドに座ったまま微笑んで私に向かっておいでおいでをしている。その優しい雰囲気につられて思わず彼のベッドに近寄った私であったが突然その足が凍った。ベッドに座った彼の脚は包帯で巻かれ、両膝から下が無かった。踵を返しその病室から逃げ出した。記憶はそこまでである。

大学生のころテレビの洋画劇場でダルトン・トランボ監督がベトナム戦争中の1971年に撮った作品「ジョニーは戦場へ行った」を見た。第一次世界大戦に出征した青年が砲弾を受け四肢、視覚、聴覚、嗅覚、言語を失う。収容された病院で痙攣を繰り返し意識がない状態として扱われていたが、ある日医師団の一人がそれが痙攣では無く彼の感情や意志を伝えるモルス信号であることに気付く。意志伝達法を得た彼は医師団に向けてある願い事をするのだが……。深い余韻をもって終わるラストには胸が締め付けられた。1990年代まで長い内戦に晒されたカンボジアでは、残された地雷により多くの子供の命と手足が失われる悲劇が近年まで続き、今なお広い地雷・不発弾汚染地帯が残され撤去作業が行われている。この原稿を書いている最中にも、ウクライナやパレスチナ・ガザでの戦闘のニュースが伝えられその終わりは見えない。

そういった記事に触れるたびに、ふとあの米兵の事を思い出す。逃げていく私の背中を見て何を思っていたのだろうか、その後どのような人生を歩んだのだろうか。世界から1日も早くすべての戦争、軍事紛争が無くなることを願ってやまない。



旧沖縄海軍病院